

## 中学生の都道府県の認識

高橋 圭子

### 1. はじめに

中学生に教える地名の数量は明治以降今日に至るまで減少の一途をたどっているが、それでも現行の中学校の地理の時間の範囲内でこれを全て消化するとすれば、地理の時間＝地名暗記の時間の様になりかねない。その結果、地理＝暗記科目という概念が中学生に生まれ、これが地理嫌いの大きな原因となる。

一方、心理学によれば地名のような要素的知識は中学1年頃までに吸収させるべきであるとされているが、地名学習もゲーム的要素を加えて行うなどすれば意外に生徒は喜ぶものである。

地理を学習する以上地名学習は避けられないものであるから、短時間で効率的に地名を覚えさせる方法の研究は地理の教師の重要な課題の1つと言えよう。

表1は、筆者の勤める成蹊中学校で中学2年生122名に『地理で地名を覚えることをどう思いますか』という問いに対して、文章で自由に回答を書かせたものの集計である<sup>3)</sup>。これを見ると『将来役立つだろう』し『重要だ』から『やむを得ずやる』が『覚えられない』というのが全体的な傾向と考えられる。肯定的な回答の中には、テストで得点と結び付く、受験に役立つといったものもあるが、これでは何のための地名学習なのかと思わされる。また『必要最少限は覚えるべき』『場合にもよる』といった回答には、地理の授業で扱われている地名の中には自分達には不要なものも含まれていると生徒が感じていることがうかがわれる。

この調査は、初めて世界地理学習に入った段階の生徒達に対して行ったものである。現在小学校では世界地理は学習せず、また本校では文部省作成のカリキュラムとは逆に中1で日本地理、中2で世界地理を学習するため、生徒が日頃耳にする機会の少ない横文字の地名に当惑していることが

表1 地理学習に対する意識(中2)

好意的なもの	中間的なもの	否定的なもの
将来役立つだろう 18	やむを得ずやる 14	覚えられない 22
重要なことだ 15	最小限は知るべき 6	すぐ忘れるから 7
楽しい 10	無意味とは思われない 4	とにかく嫌い 5
知らないと困る 7	場合にもよる 4	世界の地名は覚えられない 5
テストの時確実に点が稼げる 4	単なる暗記はムダ 3	面倒くさい 2
興味深い 3	詰め込まなければ楽しい 1	苦手 1
必要だ 3	できないとくやしいからやる 1	できれば避けた方がいい 1
地名を知っていると理解しやすい 3	今のうちに覚えたい 1	無回答 24
地理学習に地名はつきもの 2		計 122名
好き 1		(複数回答)
将来受験で役立つ 1		

表われている。その結果『覚えられない』『世界の地名は覚えられない』といった回答が多くなったようだ。

中学生にどの程度の量、どんな内容の地名を教えるべきかという議論もあるが、本論ではどのような地名が覚えやすい(覚えにくい)かということ、まず日本に限って調査し結果を分析することで、生徒の地名学習の際の認識のパターンを考察してみたい。

### 2. テスト実施について

成蹊中学校1年生77人(調査当時、日本地誌学習を開始する前の段階)と2年生80人(日本地誌をひととおり終えた段階)を対象に、都道府県や県庁所在地の名称や位置を問うテストを実施した。都道府県の位置や県庁所在地は、中学生程度では知っていた方が頭の中の地図空間が広がると考え、また居住地(大半が東京都、一部埼玉・千葉・神奈川県)から近いものから遠いものまで、なじみ

のありそうなものからなさそうなものまでなど、多種の地名が含まれるため、テスト項目に採用した。

テストの内容は、ひらがなで順不同に日本の都道府県名を羅列したものを与え、

- (1)都道府県名が正しく漢字で書けるか
- (2)県庁所在地を知っており正しく漢字で書けるか
- (3)用紙に記入された日本全国の県境入り白地図と照合してどの位置かわかるか

の3点を調べたものである。(1)と(2)は、その地名になじみがあるかどうかを知る手がかりとし、また中学生程度では難しい漢字や類似した漢字に起因する誤解も生じるのではないかと予想して、加えた質問項目である。また(3)は、視覚的なものや居住地からの距離が認知と関わっているのではとの予想により加えた質問項目である。

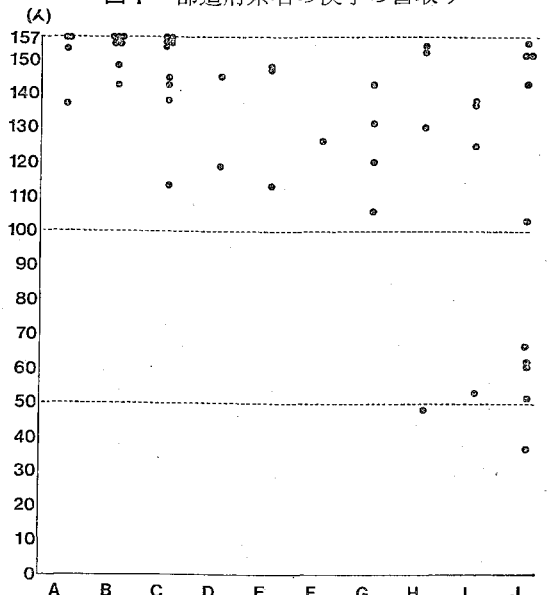
小学校での社会科学習内容が個人差に影響を及ぼす可能性も考えられるため、念のために出身小学校と小学校で県名覚えをしたかどうかを用紙に記入させた<sup>4)</sup>が、学習していないとの回答が約3分の2であった。しかし同じ学校で同じ担任の先生に習った生徒間でも回答が異なったり、学校以外でも家庭、塾など学習の場は考えられるので、小学校での学習内容は直接の関連性はないと判断した。

図1は、横軸に漢字の習得時期、(地名を構成する漢字のうち最も遅く習得することになっているもの)<sup>5)</sup>を、縦軸に正答者数を取ったものである。単に都道府県名の漢字の書取りをやらせたわけで、地名として記憶していなくとも想像で答えは書けるわけだが、1年生2年生共、正答者数と習得時期に負の相関関係が見られた。小学校で習わない漢字について見ると、固有名詞などに比較的良好に使われる岡、崎、佐、井などは書け、殆ど地名以外では使用されない岐、阜、栃、媛、茨、滋などは書けていない。

情報量の多い北海道、奈良、大阪、沖縄などは習得時期に関係なく漢字が書ける。

愛知と愛媛、香川と神奈川と石川(県庁所在地の金沢)など、似た字や似た音の混合が見られるが、後で述べるようにこれは位置の混同をも招い

図1 都道府県名の漢字の書取り



習得時期：A：小1 B：小2 C：小3 D：小4  
E：小5 F：小6 G：人名漢字 H：新漢字表  
I：当用漢字 J：その他

ている。同種のミスで和歌山を若山、鳥取を取鳥、茨城を茨木とするものが多く見られた。

図2は、県庁所在地名と県名が異なる県だけについて、県庁所在地を知っているかどうかを図示したものである。これによると、必ずしも居住地の近くが正答率が高いわけではなく、話題性のある札幌、那覇などがよく知られていることがわかる。但し漢字が難しくひらがなの解答が多い。

東京の中学生にとって、埼玉や神奈川の県庁所在地には迷う“選択枝”が複数あり、川口、大宮、川崎や、東京都や千葉県にある市が誤答として出現するが、逆に北海道や沖縄県には彼らの迷う“選択枝”が存在しない、すなわち他の市を知らないため札幌や那覇の正答率が高くなると言えよう。

似かよった字に起因する混同もやはり多く、松江、松山、高松の混同(松島、松戸、松本などの解答もあった)や、大津と津の混同などが目立った。似たイメージの市の混同も見られた。横浜と神戸の混同は、両方とも国際的な港を持つ大都市であることに起因するらしい。仙台を東北の他の県の県庁所在地として誤答している生徒も多く、『東北の大都市』ということはわかっているも正

図2 県庁所在地の認識率

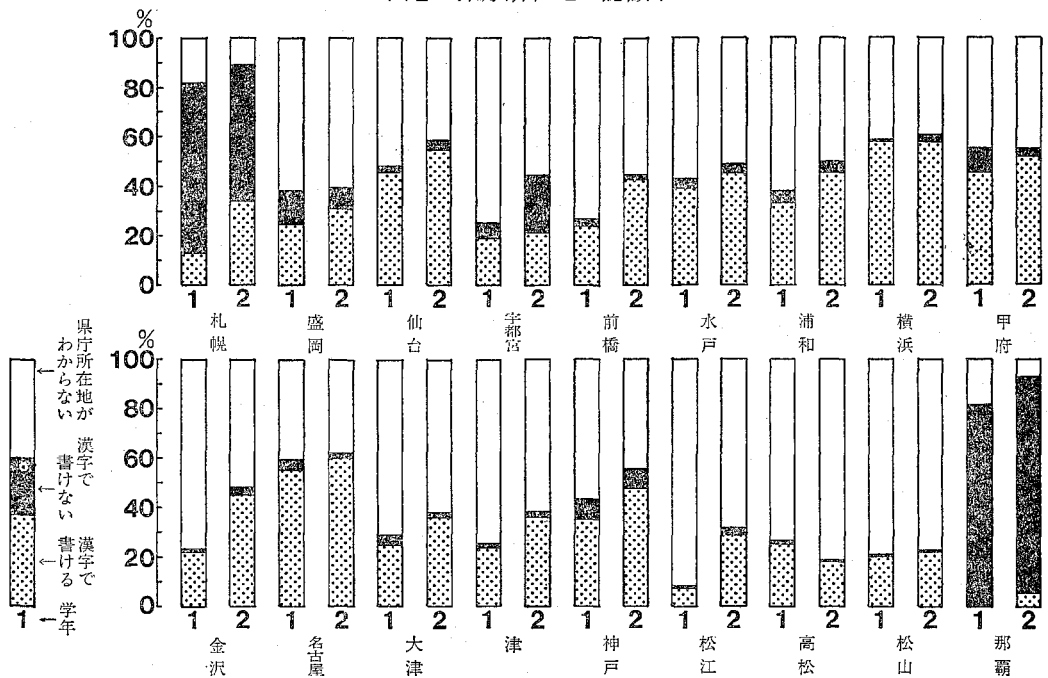
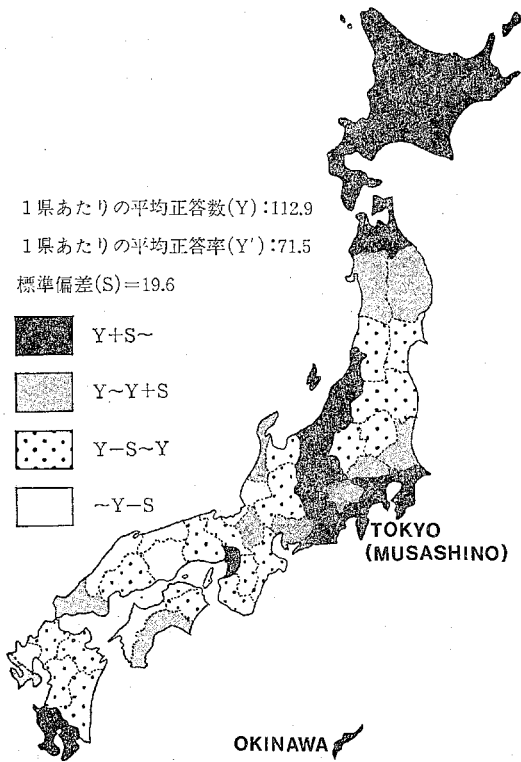


図3 県の位置の認識度 (成蹊中1, 2年)



確なメンタルマップは持っていないことがわかる。

やや高度な誤答には、青森県の県庁所在地を弘前、福島県の県庁所在地をいわき、郡山、長野県の県庁所在地を松本などとする例があった。必ずしも居住地の近くでなくても、これらの都市は生徒のメンタルマップに存在するようだ。

興味深かったのは、銚子、習志野、池田、都城といった都市や、讃岐、土佐、博多などの名称が複数の生徒の解答に見られたことである。前者は高校野球が情報源となって得た知識、後者は現在も生き残る古い地名との混同であろう。

図3は、白地図を与え、都道府県と照合させた設問の正答率を表わしたものである。1年生と2年生を比較すると当然日本地理既習の2年生の方が全体的に好成績であるが、両方とも同じ傾向が見られる。

まず東京の周辺は正答率が高く、遠隔地へ行く程正答率が下がる。しかし、島や日本列島の先端部は視覚的に印象深いためか北海道、沖縄はほぼ全員正解、青森、鹿児島、千葉も正答率が高く、石川、山口、長崎なども周囲に比べて正答率が高い。他に新潟や長野、大阪などの正答率が高いが、

理由は後に考察する。

正答率の低いのは、先端を除く東京から離れた県や、内陸の県である。前者には日本海側や四国、北九州などがあり、後者には栃木、群馬、岐阜などがある。更に形状の類似した県が隣接しているとそれらを混同する傾向がある。秋田、山形、岩手の混同、栃木、群馬の混同、鳥取と島根の混同、岡山と広島などの混同などはその例である。また愛知と愛媛、福島と福井と福岡など漢字に起因する混同も見られた。なかでも、字のイメージが似ており、県の話題性に乏しく、形状が似て隣接している鳥取と島根の混同が最も顕著であった。

以上が成蹊中学校でのテスト結果の分析であるが、この結果が一般的にも言えるかどうかを知るため、他県の中学校数校に同じテストを依頼してその結果を分析した。

### 3. 居住地と認識

他県の調査協力校は（第2表）全て国立大学の付属中学校であり、一般の公立中学校よりは高いレベルにあると考えられるが、この調査は調査校の所在地が変わった場合の傾向を比較考察するために行ったのであり、公立との学力差や協力校間の学力差は問題ではない。但し、途中まで日本地誌を学習したような学年では、既習地域と未習地域で条件が異なってくるため、日本地誌学習が完全に終了した学年、又は全く開始していない学年のいずれかを対象にしたい旨依頼した。

県名の書き取りについてはスペースの関係上くわしい報告は省略するが、成蹊中学校での結果と同じことが言えた。

県庁所在地を答えさせるものについては、やはり札幌、横浜、那覇といった話題性の多い都市の正答率が高くなった。また、例えば鹿大付中（以下略称による）のみ沖縄について名護など那覇以外の市を該当するものが見られるように、身近な地域程迷い選択枝が増加することが明らかになった。

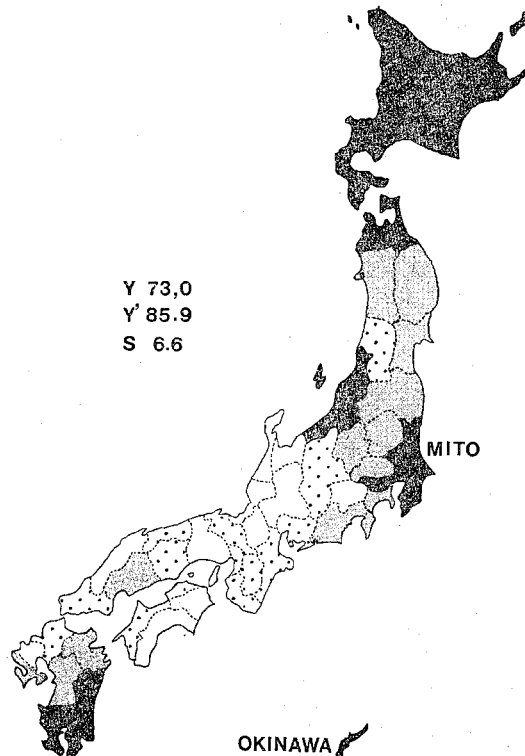
表2 調査協力校

学 校 名	学 年	日本地理	人 数
茨 城 大 付 中	3 年	既 習	85
千 葉 大 付 中	2, 3 年	〃	91
金 沢 大 付 中	3 年	〃	83
島 根 大 付 中	1 年	未 習	92
鹿 大 付 中	1 年	〃	84

次に都道府県の位置の認識と居住地との関係について、異なる調査点における各例を比較検討したい（図4 a～e）。個々の生徒にはそれぞれの個人的な事情で親しみをもち、あるいはくわしい知識を持つ県も存在するだろうが、個々の事情は無視した。学校間のレベルの差や、学年差を解消するため、各学校における1県あたりの平均解答数と標準偏差を算出し、凡例の様に分類し図示した。

これによると、各校とも居住地に近い程認識率が高く、離れるに従って認識率が低くなる<sup>7)</sup>ことがわかる。しかし、更にくわしく見ると、同じ近隣

図4-a 県の位置の認識度 茨城大付中



凡例は図3に同じ。Y：1県あたりの平均正答数、  
Y'：1県あたりの平均正答率 S：標準偏差

図4-b 千葉大付中

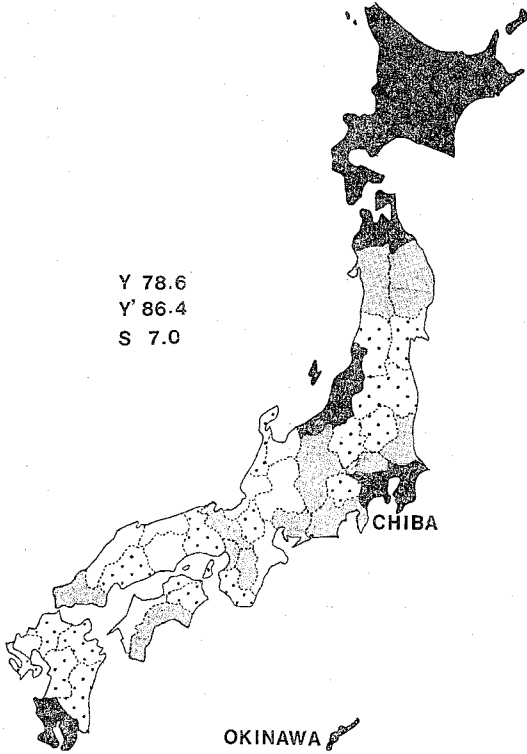


図4-d 島根大付中

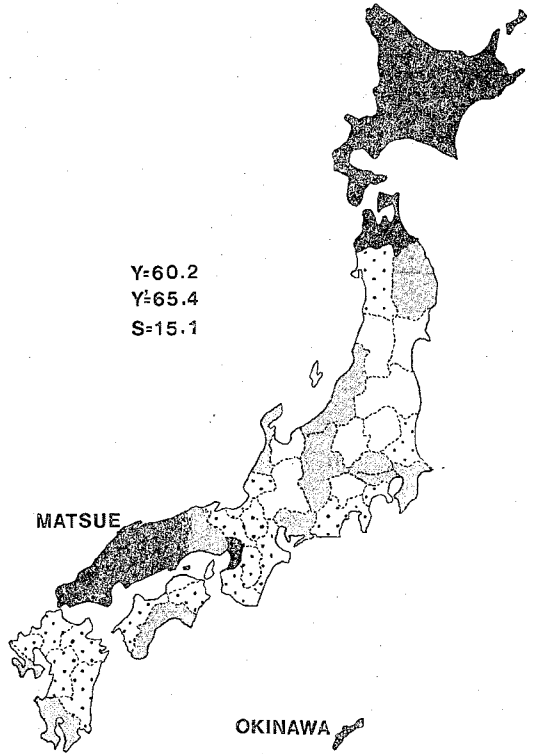


図4-c 金沢大付中

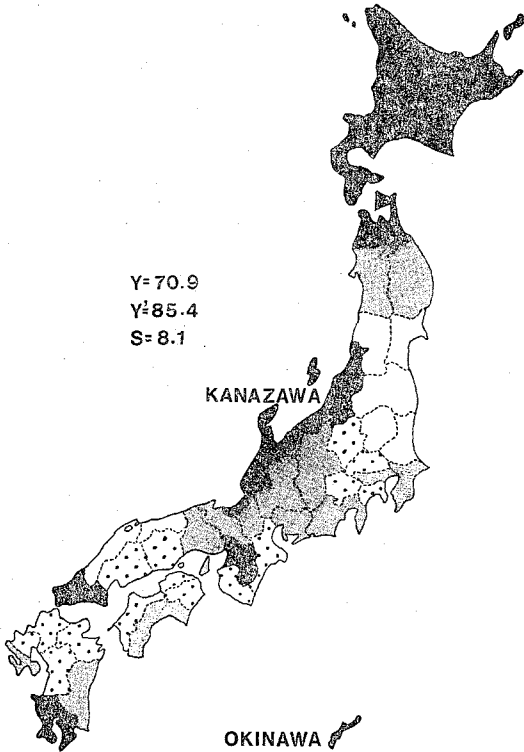
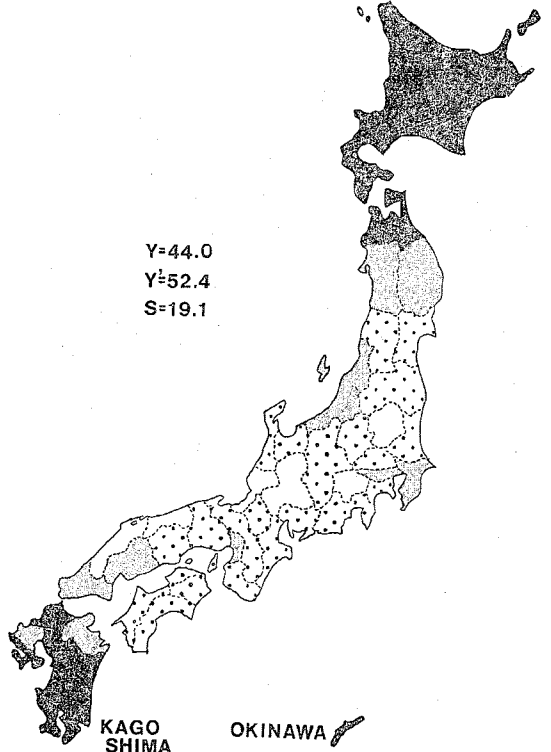


図4-e 鹿児島大付中



県でも茨城（水戸）から見ると千葉や東京に比べて栃木、群馬、福島、千葉から見ると東京、神奈川に比べて茨城、埼玉、石川（金沢）から見ると福井、富山、新潟に比べて岐阜の認識率が低い。これは、鉄道や道路など交通網による結びつきおよび調査地点に最も近い中心地へ向かう方向性と関連があるように思われる。すなわち茨城の生徒は東京へ向かう興味、関心や実用面での結びつきにより、常磐線上り方面の千葉、東京の位置はよく把握しているが、常磐線下り方面の福島や、東京方面と反対側にあり交通面での結びつきのより小さい栃木、群馬は前2者より把握していない。千葉の生徒は総武線、地下鉄東西線、京成線などで結びつく東京およびその延長上の神奈川（湾を隔てて船で結びついてもいる）はよく認識しているが、東京方面ではない埼玉、茨城に対する認識率がやや劣る。石川から見ても、北陸本線で結ばれている県とそうでない岐阜県とは認識率に差がある。この凡例による区分には表われていないが、島根から見て山陰より山陽の方が認識率が低く、鹿児島から見て福岡方面に向った場合鉄道で通過する距離の極めて短い佐賀県は地の九州の県より認識率が低いといった結果も出た。

居住地に近い、遠いとは無関係に北海道、沖縄や本州の各先端など視覚的に印象深い県は認識率が極めて高いことがわかる。他に大阪、新潟、滋賀、高知などが周囲に比べて認識率が高いが、この理由が視覚的なものであるかどうかは次の項で検討する。

先端から内陸へ入る程認識率が低くなることも全ての図に表われている。このことは田中(1982)の大阪での調査にも表われている。内陸性の強い栃木、群馬、山梨、岐阜などはどの結果を見ても認識率が低い。

前述した通り、中学生の認識を混乱させる別の要因に漢字がある。図5-aは成蹊中、5-b図は鹿大付中の、福井県の位置を問うたものに対する誤答例である。これによると北陸各県をはじめとした隣接県との混同は多いが、遠隔地にある福島との混同も多い。前項にも指摘した愛知-愛媛や滋賀-佐賀などの混同はすべての調査校に見ら

図5-a 福井県の誤答例と誤答数 成蹊中

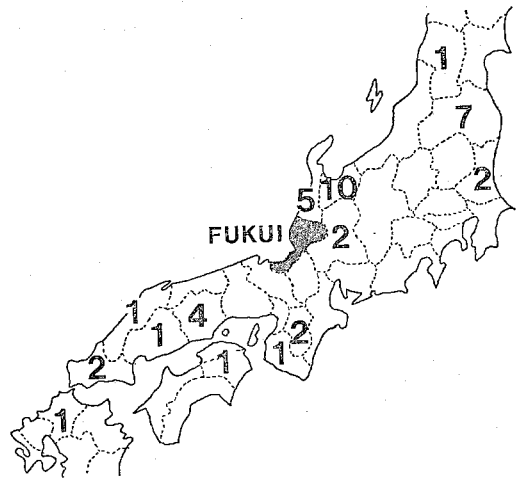
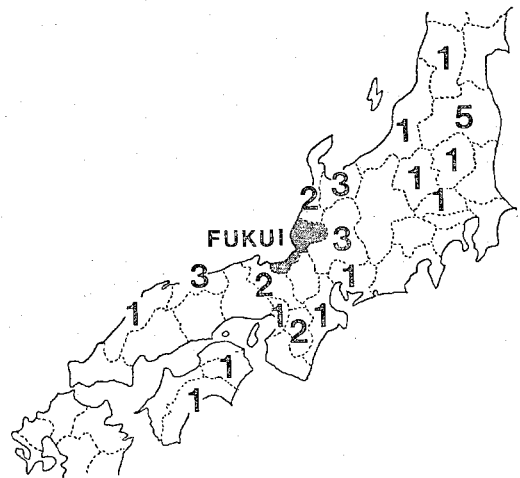


図5-b 鹿大付中



れた。

形状による混同も東北各県や山陰、山陽の各県間で見られ、島根大付中を除く各校の最も多かったミスは鳥取-島根の混同であった。

以上、前項で成蹊中の結果より考察されたことは調査点を変えても言えるとわかったが、中学生がどのような形で各都道府県を認識しているのか、すなわち視覚的なものでか、内容的なものでか、またそれらの情報はどこから得られるのか、認識率の低い地域についてはその原因は何かといったことを明らかにするため、次にイメージ調査を行った。

4. 認識の内容

成蹊中学校1年生77名に対して、都道府県に対するイメージ調査を行った。

調査の内容は、全国の47都道府県に対して、こちらで提示した23のイメージを表わす選択枝の中から、イメージに合うものをいくつでも選んで書かせるというものでてゐる。提示したのは、「暑い」、「暖かい」、「涼しい」、「寒い」、「明るい」、「暗い」、「広い」、「狭い」、「にぎやか」、「静か」、「新しい」、「古風」、「細長い」、「四角い」、「丸い」、「遠い」、「近い」、「親しみがある」、「あまり関係ない」、「楽しい」、「つまらない」、「進んでいる」、「遅れている」の23の選択枝である。これ以外に書きたい単語があれば自由に記入させ、更に、イメージなし、

という選択枝を加えた。従って複数回答であり、イメージの強い都道府県は回答数が多くなり、弱いものは少なくなる。表3は回答数の多い順に都道府県に順位をつけたものであるが、これと図3とは、当然ながら同じ傾向が見られる。すなわちイメージの強い県はよく記憶しており、弱い県はあまり記憶していない。

また、特定の1~2の選択枝に回答が集中する都道府県と、回答内容が多岐にわたるものがある。前者の例としては新潟や京都が挙げられよう。新潟は、「寒い」(59.7%)、「細長い」(48.1%)の2つに、京都は、「古風」(72.7%)に回答が集中した。反対に東京、大阪などは総回答数が多いがいろいろな選択枝に回答が分散した。和歌山、岡山などもはっきりしたイメージがわかずその結果多くの選択枝に回答が分散したようだ。

次に、地域によるイメージの内容について考察する。

北海道と東北北部は「寒い」が第1位を占め、北海道は「広い」、「遠い」が続くが、東北北部は「暗い」、「遅れている」、「遠い」が上位を占める。

福島と北関東(栃木、群馬、茨城)は回答数が少なく、東京から距離的には近いにもかかわらず特定のイメージのない地域とわかる。これらの県はいずれも、回答の上位が「近い」、「つまらない」、「涼しい」となっている。

表3 各県のイメージ

順位	都道府県	回答数	イメージなし	順位	都道府県	回答数	イメージなし
1	東京	302	1	25	福島	81	26
2	北海道	267	0	26	愛知	80	28
3	大阪	193	0	27	山口	77	27
4	沖縄	177	7	28	宮崎	76	23
5	埼玉	161	6	29	群馬	75	21
6	新潟	159	4	29	大分	75	35
6	山梨	159	11	31	福岡	74	26
8	長野	151	5	32	富山	73	31
9	青森	150	7	33	茨城	72	22
10	神奈川	147	10	33	石川	72	35
11	秋田	141	9	33	熊本	72	22
12	京都	137	2	36	栃木	71	25
13	千葉	135	6	37	宮城	70	26
14	奈良	129	7	37	三重	70	31
15	岩手	121	14	39	香川	69	36
16	山形	110	20	39	高知	69	20
17	広島	103	9	41	徳島	65	31
17	鹿児島	103	14	42	滋賀	62	32
19	長崎	102	13	42	岡山	62	34
20	愛媛	98	15	44	佐賀	61	35
21	静岡	96	16	45	和歌山	58	29
22	鳥取	92	21	46	岐阜	50	47
23	兵庫	88	27	47	福井	47	46
24	島根	82	33				

南関東の各県は、身近な地域であり回答数も多く、自分達で書き加えたイメージ単語も多い。東京都は最も回答数が多く、「にぎやか」、「進んでいる」、「狭い」などが特に多い。

埼玉と千葉には、生徒は否定的なイメージをつけたがる。「遅れている」、「暗い」、「つまらない」の他に、「田舎」、「ださい」などと書き加えた生徒が多い。これは1つには成蹊中に都外からの通学者が少数おり、それを「差別」して喜ぶ中学生の精神年齢に起因している。また特に埼玉については、けなして喜ぶマスコミの風潮の影響が表われたようだ。これに対して神奈川は、横浜、川崎、鎌倉、湘南などのイメージが強いためか、「にぎやか」、「楽しい」、「親しみがある」などが上位にくる。

新潟の認識率が高いことは前述したが、認知はやはり視覚的なものと関わっているらしく、「細

長い」に多数の回答が集中した。これと「寒い」の他、「楽しい」、「親しみがある」など好意的なものや、「スキー」という書き込みが上位にある。向後(1985)の高校生を対象とした研究には、新潟は田中元首相のイメージと結び付き否定的にとらえられがちであると指摘されているが、年齢による興味、関心の差の反映であろう。

本州中央部内陸の長野は、スキーや避暑地のイメージが強く、回答数も多く内容も好意的であるが、岐阜、滋賀にはイメージがわからず、回答内容も多岐にわたる。東海地方には暖かくて明るいイメージが、北陸地方には暗くて寒くて遅れているという共通のイメージがある。

近畿では、三重、和歌山は情報量が少ないためか回答数が少なく、内容は「暗い」、「つまらない」が多い。京都、奈良は古都のイメージが強く、回答は「古風」、「静か」に集中し、奈良には「大仏」と書き加えた生徒も多かった<sup>9)</sup>。大阪は、「にぎやか」、「進んでいる」、「せまい」、「明るい」と東京のイメージに類似する一方で、生徒は「イヤらしい」、「嫌い」などと書き加えているが、東京人の大阪への対抗意識が表われている。このように東京人と大阪人が互に対抗意識を持ち合っているということは、中村(1978)も指摘している。兵庫は、大阪に続く瀬戸内の臨海地域しか思い浮かばないのか、「進んでいる」、「にぎやか」、「明るい」が上位にくる。大阪、兵庫の回答は、世間を騒がせ現在まだ解決していない『グリコ森永事件』に関連するものも多い。田中元首相には関心がなくとも、前述のようにグリコ犯や高校野球の情報はマスコミから入って来るのはいかにも中学生的である。

中国、四国、九州地方には「暖かい」、「暑い」の選択枝に回答が集中する。近畿以東には、東海を除き殆どこの2つは出現しないことから、近畿より西側が暖かいととらえられているとわかる。愛媛と沖縄を除く地の県の上位には「暗い」、「つまらない」の回答がくる、特に広島、長崎には「原爆」、「こわい」、「悲しい」などと書き加えた生徒が多い。愛媛は第1位がみかんという語になり、「暖かい」、「楽しい」、「明るい」と続くが、みか

んからの好意的なイメージではないかと思う。沖縄も、「楽しい」が多く、これは観光地のイメージからくるのだろう。

全体的にみて太平洋側の第2次・第3次産業の発達している地域にはプラスのイメージが、日本海側や内陸の第2次・第3次産業が相対的に盛んでない地域にはマイナスのイメージがあると言える。

## 5. まとめ

中学生の日本の都道府県の認識のパターンを調べるための調査を行って来たが、以上をまとめると次のようなことが言える。

- (1)認識のパターンには、視覚的なもの、マスコミが情報源となるもの、身近な地域については実際に持つ印象が結び付くものなどがある。
- (2)視覚的な認識はかなり優越する。島、半島や形状に特徴ある県はよく覚え、形状の類似したものを混同する。
- (3)視覚的な混同の一種とも考えられるが、漢字に起因する地名の混同がイメージ形成に混乱を与えることもある。
- (4)マスコミからの情報のうち関心を覚えるものは、地名を認識しイメージを形成する情報源となる(例えば高校野球、観光地など)。
- (5)身近な地域にも順位があり、より中心に近く、関心のある地域程よく認識する。

今後の課題は、更にくわしく認識のパターンを調査することで、そのために調査の対象をふやし年齢層や男女別の比較も行いたい。また世界の地名についても同様の調査を試みたい。

終りに調査に御協力下さった各中学校の先生方に厚く御礼申し上げます。

## 注

- 1) 田中(1982)など
- 2) 相良(1950)
- 3) 例えば『必要とは思いが嫌い』などと書いてある文章から判断して分類したため、集計は複数回答となっている。



- 4) 成蹊小学校からの入学者が約半数で、残りは外部のいろいろな小学校からの入学者である。
- 5) 人名漢字と新漢字表、当用漢字のそれぞれに含まれる漢字は、生徒の目に触れやすそうな順序を判断し、横軸に並べた。
- 6) 答えのわからない生徒は、機械的に県名と同じ名称を書くため、県庁所在地の都市名が県名と同じ県は正答率が実際より高くなる。
- 7) 以下、認識率とは正答率を指す。
- 8) 但し、選択枝中「あまり関係ない」はイメージなしの意味にとった生徒が多かったようで、表現が不適切と判断して総数から省いた。
- 9) 中学生は、他の選択枝が形容的な単語であるにもかかわらず思いついた単語を自由に書き加えた

ので、名詞や固有名詞（青森→りんご、滋賀→琵琶湖など）も登場した。

#### 参考文献

- 向後 武(1985)：日本各地に対する好悪イメージ，東京大学理学部地理学教室卒業論文
- 相良守次(1950)：『記憶とは何か』岩波新書
- 田中耕三(1982)：地名の位置記憶に及ぼす条件と因子——とくに、視覚的錯誤傾向とその対策試案——『新地理』30—3
- 中村 豊(1979)：わが国のメンタルマップの空間的パターンと居住地選好体系『人文地理』31—4
- (昭57 院)

Perception of the Secondary School Students on  
Japanese Prefectures  
Keiko TAKAHASHI